

棚倉城ができるまで

棚倉城ができる前は、赤館が中心で、伊達氏(宮城県・佐竹氏(茨城県))と白川の結城氏などの攻防が続き、最後は佐竹氏が棚倉地方を支配することとなった。
徳川氏が天下統一すると佐竹氏は秋田に移されて、棚倉地方は、北九州の立花氏が初代棚倉領主となる。



初代城主
丹羽五郎左衛門長重公
(一六三〇～一六七〇)

丹羽氏は、関ヶ原の役で豊臣方であったため領地を取り上げられたが、慶長八年(一六〇三)常陸古渡で一万石の大名に復活、同じく江戸崎で二万石、元和八年(一六二二)には、五万石の棚倉領主となる。

寛永元年(一六二四)幕府の命令により、この地にあった近津明神を馬場に移して平城の棚倉城を築き初代城主となる。

城の規模(大きさ)

本丸の四方は多門(長屋のような門)で土塁の上を囲み、その長さ約六〇四米、高さは三・八米あり、壁には四一六の狭間(矢・鉄砲を打つ窓)があった。角櫓二階建て四つ、追手門・追手二の門(舁形)・北門・北二門・南門があった。本丸内は東西に約六〇米、南北約七四米の広さで、土塁の高さ約六・四米、内堀の幅約三六米、堀の深さは約七・三米、水深は約三・八米と記録にある。
二の丸四方の堀の長さ約一〇五米で、約一・九米の高さの塀が約二・二五米の土手の上にあった。塀の狭間九一八、堀の幅約一四米、深さ約六米で水深は約二米であった。

寛永二年着工し、同四年未完のまま、丹羽長重は白河へ十万石で移る。城の呼び名は城の壁が荒



三代城主
内藤豊前守信良公
(一六八五～一六七四)

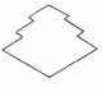
寛文五年(一六六五)城主となる。同年、市坂(旧上台への道)に愛敬稲荷神社を建てる。

同十二年、城下の大火で武家屋敷一三六戸(北町・南町)、民家三二二戸(新町・古町など)が焼けた(現棚倉駅近くにあった長楽寺付近から出火したといわれている)。
延宝二年(一六七四)、城主を退き、元禄七年(一六九四)蓮家寺境内に常念仏堂を建てる。
同八年、亡くなる。(七十二歳)



四代城主
内藤豊前守弼信公
(一七〇五～一七〇五)

延宝二年(一六七四)に六万五千石で城主となる。同十二年に、本丸土塁上に鐘を造り、朝夕時刻を知らせる。同十四年、宇迦神社の拝殿を再建



八代城主
小笠原佐渡守長堯公
(一七七一～一八二二)

安永四年(一七七六)十七歳で城主となる。天明四年(一七八四)領地引替えて、嫡代官より瀬ヶ野・小爪・強梨・戸中・漆草・大梅・福岡・上手沢・下手沢・北山本・中山本・下山本・上渋井・中野・中塚・川上・川下を引き継ぐ。
寛政十二年(一八〇〇)浅川一揆を抑えるため、棚倉より兵を出す。文化九年(一八二二)長昌に家督をゆずる。(隠居して南粵と名のる。)同年五月亡くなる。(四十九歳)



二代城主
内藤豊前守信照公
(一六七〇～一六八五)

寛永四年(一六二七)近江(滋賀県)より五万石の棚倉城主となる。

寛永六年、京都大徳寺高僧、玉室和尚が紫衣事件にかかわって棚倉お預けとなったが、内藤城主は、赤館南麓にあった光徳寺に一つの建物を立てて大切にお世話をする。

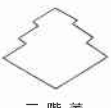
城下町は商品の問屋や荷物を運ぶ馬の駅もできて、経済の中心地として発展する。

慶安三年(一六五〇)から承応元年(一六五二)大阪城代という役にもついていたが寛文五年(一六六五)江戸にて亡くなる。(七十四歳)



六代城主
松平右近将監武元公
(一七二八～一七四六)

享保十三年(一七二八)上野館林より五万四千石にて棚倉城主となる。同年、五万五千石、寺社奉行となる。延享三年(一七四二)館林に帰城し、老中職となる。



七代城主
小笠原佐渡守長恭公
(一七四六～一七七六)

延享三年(一七四六)七歳で遠江掛川(静岡県)より棚倉城主となる。近江(滋賀県)の二万石と棚倉の四万石で六万石となる。寛延三年(一七五〇)塙騒動(戸塚)があり、嫡代官の依頼で棚倉より兵を出す。(塙は幕府領だった。)明和四年(一七七六)佐渡守に名が変わったが、近江二万石の



十一代城主
井上河内守正春公
(一八〇〇～一八三六)

文政三年(一八二〇)城主となる。文政七年、英国船が常陸大津に上陸したので、棚倉は海岸に陣屋を設けて警備した。天保五年(一八三四)寺社奉行となる。天保七年、上野館林(群馬県)の城主となる。



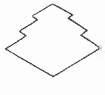
十二代城主
松平周防守康爵公
(一八三六～一八五四)

天保七年(一八三六)石見浜田(島根県)より六万四千石で棚倉城主となる。山本不動尊へ開運祈願の石灯笼を寄進(寄付)する。



五代城主
太田備中守資晴公
(一七〇五～一七二八)

元禄十五年(一七〇二)三十三観音堂を蓮家寺に寄進(寄付)する。宝永二年(一七〇五)駿河田中(静岡県)に移る。



九代城主
小笠原主殿守長昌公
(一八二二～一八七〇)

文化九年(一八一二)城主を継ぐ。文化十年、紅葉山火防の役につく。文化十四年、肥前唐津(佐賀県)城主となる。



十代城主
井上河内守正甫公
(一八二七～一八〇〇)

文化十四年、遠江浜松(静岡県)より六万石で棚倉城主となる。文政三年(一八二〇)幕府の役を致仕(やめ)、病氣といつて、棚倉へは来なかった。棚倉城に蛇が多いという伝説はこの頃つくられる。

嘉永七年（一八五四）城主を退く。安政二年（一八五五）隠居（彈正少弼と名のる。）



十三代城主
松平周防守康圭公
（一八五四～一八六二）

嘉永七年（一八五四）兄康爵の養子となり城主になる。藩政改革に意を用い「機業（はた織り）」「瓦焼」「梨子園」「こんにやく栽培」「牧馬（放牧による）」など奨励した。文久二年（一八六二）に亡くなる。



十四代城主
松平周防守康泰公
（一八六二～一八六四）

文久二年（一八六二）城主となる。元治元年（一八六四）天狗党鎮圧のため、棚倉と江戸屋敷から兵を出す。その年十六歳で亡くなる。



十五代城主
松平周防守康英公
（一八六四～一八六八）

元治元年（一八六四）城主となる。慶応元年（一八六五）老中職を二回勤める。慶応二年（一八六六）天狗党事件で、常陸に兵を出した功績もあり、二万石加増で八万四千石となる。（天狗党員の処刑も行なう。）同年六月、白河城主になるよう命令があったが、同年十月中止となり、川越（埼玉県）城主となる。このとき禄高八万四千四十三石となる。



十六代城主
阿部美作守正静公
（一八六六～一八六八）

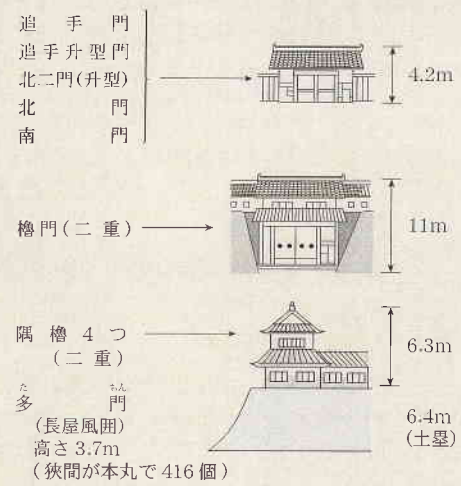
阿部家は八代四十三年間白河城主であったが、慶応二年（一八六六）六月十九日、十万石で棚倉城主となる。慶応四年鎮撫総督（官軍）の命令で

一時出兵したが、奥羽越列藩同盟（東北の各藩と新潟の藩が手を組んで官軍に立ち向かう）に入り白河城を中心に官軍と戦い、激しい攻防の末、東軍（東北勢）は敗れ、それぞれの藩に帰る。この戦いで棚倉は五十五名の戦死者を出す。ついで官軍は棚倉総攻撃に入り、六月二十四日、棚倉城は落城した。この戊辰戦争で棚倉城と古町など戦火で焼失した。
棚倉城は江戸時代初めにできて、江戸時代に終わった。（二四四年の歴史であった。）

棚倉城見取図



(明治初めごろの絵図)



棚倉城と棚倉藩

